

部活動の学び

校長 渡邊 琴子

私は、本校の校長に着任すると同時に、愛媛県高校体育連盟ラグビーフットボール専門部長を仰せつかりました。各種目の専門部長については、自身の競技経験を踏まえて任命されている校長もいますが、もちろん、私はラグビーの経験者ではありません。にもかかわらず、各公式戦で特等席から試合を観戦し、表彰状を代読し、恐れ多くも講評まで述べるという冷や汗ものの役割を毎回担っているわけです。その道に疎いながらも一年間大会に参加し続けていると、少しずつですが理解できることが増え、自分なりの楽しみ方もできるようになりました。ラグビーはボールを前に運ぶスポーツですが、手でボールを渡す際には後ろにいる仲間にはパスすることができません。陣取り合戦であるラグビーにおいて自分の仲間を少しでも前に進めるためには、ボールを託された自分が前に突き進むしかないのです。併せてラグビーはフィジカル要素が強く、ボールを託された途端に、相手チームの選手がボールを持っている選手を目がけて容赦なくタックルを仕掛けてきます。選手と選手の体がぶつかり合う鈍い音を聞くと、とても見ていられないような気持ちになりますが、それでも反撃を一身に受けて立つ覚悟で、チームを前に進めるために最前線を駆ける選手の勇気に、私はいつも胸を打たれます。それは、選手の姿が人生の一面を暗示しているように思えるからでしょう。

スポーツに人生の物語が見出されることは珍しいことではありません。もうずいぶん前の話になりますが、学生時代に全く運動部の経験を持たない同僚が、自分の子どもにはぜひ野球をしてほしいと話すのを聞いたことがあります。理由を尋ねたところ、犠打を例に挙げて、「チームのために、自分がそのときにできることを確実にやり遂げることの尊さを体験してほしいから」と述べていました。今回、犠打について調べたところ、門外漢が軽々と語るようなものではないことを知りましたが、確かに野球のプレーに自己犠牲的な展開を感じることは多いように思います。少なくとも、私が高校野球に感じる美学のようなものは、そのような野球の物語性と無縁ではないと感じています。

また、本校の弓道部が三年連続してインターハイ団体出場を決めました。弓道の試合会場に足を運んだことのある方は、本校でもそうたくさんはいないかもしれません。弓道の個人戦の決勝では、「射詰（いづめ）」といって、一射ずつ矢を放って失中した者が順に除かれてゆき、最終的に残った者、すなわち的中させ続けた者が勝ちとなるという仕組みが採用されます。緊張と疲労が募る中、的中させ続ける極意とはどのようなものなのか。本校の弓道部顧問鈴木教諭の「的に向かったときに、ふっと気持ちが揺れることがある。そうすると当たらんのです」という言葉を、私は平常心の真髄を示唆するものとして聞きました。そして、その平常心を下支えするものは、日々まじめに努力を重ねること以外にはないのでしょうか。

運動部の例をいくつか挙げましたが、言うまでもなく他の運動部でも、文化部、生産部、同好会でも、その活動の中で生徒たちは様々な人生の物語を体験しているはず。集団を率いて困難や恐怖に立ち向かう勇気を、全体のために自分の役割をやり遂げる誠実さを、

物事を極めるための努力に下支えされた心の強さを、今日も学校のあちらこちらで生徒が身に付けていることを思うと、学校というところは「人を育てる泉」のような場所だと感じます。部活動が学校教育の果たす役割として大切にされる所以は、たくさんの人生の物語を、生徒が体験を通して理解することができるからにほかなりません。そこには勝ち負けや結果だけではない学びが確かにあると感じます。学校の部活動のあり方について、大きな転換期を迎えている今、改めて子どもたちに身に付けさせたい力とともに部活動の意義を考えると、子どもたちが部活動を通して学んできたことの「かけがえのなさ」を念頭に置くことが重要であると考えています。